
漆黒の姫君

叶 紫穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の姫君

【Nコード】

N4822V

【作者名】

叶 紫穂

【あらすじ】

フィオナ国に最近噂に留まっている伝説が流れた。竜を従えた「漆黒の姫君」彼女の存在は戦争を起こし、平和を乱す。だが彼女の願いは約束を果たすこと、それだけだった……。

人物紹介

セルファ・メリエツト

性別：女

容姿：黒髪黒目

竜であるルイと契約した少女。「漆黒の姫君」と言われているが実際は姫君ではない。黒髪黒目は今は存在しないある一族の血を引いていると思われる。

契約の言葉やら契約の力の引き出し方やらを知っている様子を見ると以前も何かと契約したことがあるのだろうか、まだ謎が多い少女である。

ルイ

性別：男（雄）

容姿：黒髪金目

逸れ者の竜で常に一人で行動していたが、セルファと契約して一緒に行動するようになった。竜の中でも強い力を持ち、孤立していたのはその為と思われる。

シエールラー

性別：？

容姿：銀の鱗に金の瞳、と言われている

竜王。あまりに強大で、あまり姿を現さない。その為あまり情報が知られていない。

人間は竜王の存在を知らないため、名その物も広まっていない。

序章？

街は壊滅危機に陥っていた。傍の森にドラゴンが住み着いたのだ。国に求めた救助もことごとく失敗している。

そんな中、思案した街の者たちは結論を出した。・・・生贄を捧げると。

何処かの占い師がそう言ったらしい。それを信じたのだ。

それから何年も街の娘を捧げ、とうとう私に白羽の矢が立った。

「ドラゴンの住んでいる形跡が、ない」

果たしてそれはいつ言った言葉だったろうか。

確かにそうだった。森の中は静けさと平穏が広がっていた。自然が溢れ、鳥が囀る。

・・・自然が溢れ？

この森の環境は最悪だった筈だ。何故？

ドラゴンが居るから？

つまり、ドラゴンは・・・

「人間か……」

男の声が聞こえ、はっと振り返る。そこに居たのは人間の姿をした男だった。

黒い髪に、金色の瞳。長身の細身の男。だが肌に感じるこの波動は、どう考えてもドラゴンのモノだった。

「あなたが……ここに住み着いたドラゴン……?」

静かに聞くと男はふつと笑う。

「住み着いてはいない……がな。……人間にしてみれば同じ事か」

そうやって一人で考え込む姿は、何だかとても人間らしくて滑稽だ。そしてそれは、彼が長く人間の様に生きてきたことが判る。

「何故……?」

知らないうちに言葉が漏れた。

「あなたは、人を理由も無しに殺さない人だと思う。なのに何故、生贄を必要とするの?」

判らない。「ドラゴンは人を害さない」あの人は、あのドラゴンはそう言っていたのだから。彼が生贄を必要とする理由が判らない。

「お前は……」

彼はボソツと呟いた。

「お前は、普通の人間と何かが違う。……お前は何だ?」
「……そんな事、こっちが聞きたい。」

私は、私がおなのかが分からない。
でも……

「私は人。それは何があっても私がそう思う。ううん、思い込む。それは他人に左右される事じゃ無い」

彼の目を見て、その眼光に負けないように返した。

そして緊迫した空気が一気に消え、彼が膝を着いた。

序章？

「私は人。それは何があっても私がそう思う。ううん、思い込む。それは他人に左右される事じゃ無い」

そう言った少女の黒い瞳は、深い絶望を持ちながらも美しく、澄んでいた。

その奥に、深層に引き吞まれそうになって実感する。

自分が望んでいた者に出会えた事を。いや、望み以上だった。

彼女の前に膝を着く。これは、従撲の証。

「私は、貴方を主と認めました。そのお心は、主次第です」

一瞬驚いたように目を見開いたが、理解したようにその顔には微笑が浮かんでいた。

「受け入れましょう。・・・この契約は竜王シエールラーの名の下に、セルフア・メリエツトが執り行う。我が望むのは自由、この者を縛らず、我も縛られることはない。その契約に賛同するか」
彼女が契約の仕方を知っている事に驚いた。が、理解する。そう、竜以外は知らないはずの竜王の名を知っていたから。つまり竜王に会った事があるとあるという事。知っていても可笑しくない。
そしてその内容は彼女を表していた。、自由”彼女は誰も縛らず、誰にも縛られない。それが主の望みならば……

「御意に、我が主」

そしてここに伝説が生まれた

⋮

0 - 伝説の姫君

街に危機が訪れた

凶悪なドラゴンが住み着いて

娘を生贄に捧げると

横暴を繰り広げたのだ

それに困った者達は

国に助けを求めたが

ドラゴンの力は凄まじく

倒すことは敵わない

諦めてしまった人々は

望みど通りに生贄を

差し出すことを決めていた

しかし一人の麗しき

少女がそれを認めずに

漆の髪を翻し

ドラゴンの元へへと

一人立ち向かのだ

そして時が過ぎて行き

静まり返ったその横暴

不思議に思った人々は

探しに森へ侵入し

驚きに言葉を失った

その恐るべき者の

その存在は消えていた

立ち向かって行った麗しき

一人の少女の存在は

たとえ時が過ぎようと

消える事は無いだろう

そして伝説は始まる

漆黒の姫君と竜は

来るべき刻を待ちながら

1・さあ、旅を始めよう

ここはレーザーリーの街のギルド協会。
そこにとても目立っている二人の人物がいた。……悪い意味で。

「だからさっきから言ってるでしょ!? 何で私は戦ったらいけない訳!？」

「こっちもずっとさっきから言っています!! 仕事は俺がやるからあなたは大人しくして下さい!!」

「私だって戦える!! それに従僕だったら主の言うこと聞きなさい!!」

「従僕だから言っているんです!! ここに来る途中の傷もまだ完全に治ってないじゃないですか!!」

「すぐ治る!! それにそれは戦ったらいけない理由に成らないですよ!!」

さっきから怒鳴りあいを繰り返している男と少女は周りを気にせず

に今だ繰り返していた。傍から聞いていると互いの言いたいことが丸分かりなのだが、重要な互いは気づいていないらしい。怒鳴り合いはまだ続く。

この怒鳴り合いでも十分目立つが、そうでなくてもこの二人は確実に目立つだろう。

少女を心配して怒鳴っている男の容姿はぱつと見て分かるくらいに整い、その金色の目は変化の者を表していた。

男一人に戦わせるのを心配して、髪を乱しながら怒っている少女も、長い髪で多少隠れているが綺麗な顔立ちをしているのが分かる。それにその黒髪と黒目が、最近広まって来た竜を従える伝説の姫君と同じである事も拍車を掛けるだろう。

「あなた一人に戦わせて、生きているか死んでいるかも分からず心配しながら待っていると言うの!?!……………もう、そんなの嫌なの……………」

少女はそう言って、とうとう泣き出す。男もそれでやっと周りの視線に気づいたようだ。

「っ……………分かりました……………。でも前みたいな無茶はしないで下さいよ?。」

溜息をついて吐き出すように言った。

「ほんと?。」

「本当です。だから早く泣き止んで下さいよ、周りの視線が痛いです」

言われてキョトンとしていた少女は周りを見渡し、白い肌を朱に染めて男の背中に隠れた。

「お騒がせしました」
やっと落ち着いたらしい彼女が服の裾を握ってきたまま周りの人々に言う。その頃には何時もの人形の様な表情に戻っていた。：表情
だけが

2 - 悪人は何処にでも居る

「…気が付いてますか？」

レイの言葉にセルフアは小さく頷いた。

「後ろから着いてくる変な人達のことでしょう？ さっきの騒ぎで目立った…のかな？」

「恐らくは」

小さな声で話し合っていると足音が聞こえるくらいに近くなる。

「何人いるの？」

「7から10人位でしょうか。どうします？」

レイの目は特殊だ。セルフアや人間と違い、夜目が利く。更に遠くまで見渡せるのだから、こういう時での不意打ちが意味を成さない。しかしその目を見れば人間でないことも一目で分かる。黄色く、瞳孔が縦に割れた瞳。それがレイの、ドラゴンの特徴だ。

「それ位ならちゃっちゃと片付けちゃって。もう眠い、限界」

セルフアはそう言うところらに転がっていた木の箱に座り込む。口調からすると手伝う気は無いらしい、レイは表情だけで苦笑した。

「では、行って参ります」

その声を掛けて、彼女を守るように後ろを向く。その背中に言葉が掛けられた。

「気を付けて…私の騎士の、御武運を願います…」

自然にレイの口元が緩む。

…ああやっていつもいきなり何かを言い出すが、我が主は優しく、礼儀正しいのだ…

「御意に」

レイは呟くように答えて、敵に目を向けた。

「出て来て下さい、もう気づいている事ぐらい分かっているでしょう?」

レイの静かな声がある場に良く響く。そしてその声に応えるかのようにバラバラと統一感の全く無い数人の男達が二人を囲むように立ち塞がった。

「やれやれ、その様子から行くと臨時で集めた人数の様ですね、一体何の用でしょう?」

まるで惚けた様に無害な顔をしてレイは質問を投げかけた。と言っても分かっているのだが、そこは空気を読むべき所だろう。と、小さく少女の笑い声が聞こえて顔を顰めた。

「ふふっ… やっぱレイ、あんた最高よ… ククッ…」
壺に入ったらしくセルフアの肩が小刻みに震えている。

「それはそれは良う御座いましたねー」

段々とやる気が無くなってきた。めんどくさくなったとも言つ。

「質問しといて無視してんじゃねえよ!」

そんな濁声が聞こえた気がして振り向くと頭から髪の毛が絶滅して残念な格好をしているゴツイ男が 「失礼な言葉を並べてんじやねえ!」 「すみません、声に出していました?」

今度は押し殺したのではなく、華やかに楽しそうな笑い声をした男が段々苛ついて来る。多分「こんなヤツ等相手にしたくねえ」的な事を考えているのだろう。こっちも同じ事を思っている、筈である。っていつか…

「めんどくさいんだよなあ…」

周りに居た全員が反応した。その間にセルフアに近づく。

「お嬢様、少々手荒に行きます」

「ん」

いわゆるお姫様抱っこでセルフアを抱き、飛んだ。

「逃げるが勝ちなんで逃げさせて頂きます、帰りはお気を付け下さい」

そしてそのまま男達の前から消えた。

「……ねえ、レイ」

セルフアが呟く様に言って話しかけてきた。

「はい、何でしょう?」

空の中、あまり喋ると下を咬むものだが、慣れているのだろうか。

「羽……」

「は?」

「羽、触らしなさい」

「えっと……降りてからに、して下さい」

「うんっ」

……平気な様だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4822v/>

漆黒の姫君

2011年11月16日21時04分発行